

1. 平成27年度学習状況調査の結果から

		2年	3年	4年	5年	6年
国語	強み		△話す・聞く能力 △書く能力	△伝統的な言語文化 △知識・理解・技能	△話す・聞く能力	
	弱み	▼全体的にやや低い			▼書く能力	▼話す・聞く能力 ▼書く能力 ▼読む能力
算数	強み			△図形		
	弱み	▼活用(表現力) ▼記述式回答	▼数量関係		▼全体的にやや低い ▼知識・理解	▼量と測定 ▼知識・理解 ▼技能
理科	強み			△関心・意欲・態度 △科学的な思考・表現 △観察・実験の技能		
	弱み				▼全体的にやや低い	▼関心・意欲・態度 ▼思考・判断・表現 ▼観察・技能
社会	強み			△活用		
	弱み				▼全体的にやや低い ▼知識・理解	▼関心・意欲・態度 ▼思考・判断・表現 ▼観察・資料活用 ▼知識・理解
意識調査	質問紙	△「家族のささえ」「友達のささえ」「学級の絆」が強みである。 ▼「いじめのサイン」「家庭学習力」「規範意識」が課題である。				
	回答	いつも、コツコツ勉強している				
		—	—	肯定率 62.5	肯定率 63.6	肯定率 52.0
		本や新聞を読んでいる				
		—	—	肯定率 58.3	肯定率 70.4	肯定率 66.0
		授業に集中できないことがある				
		肯定率 64.1	肯定率 58.3	肯定率 39.6	肯定率 63.7	肯定率 44.0
iチェック	回答	家で、ほぼ毎日勉強している				
		肯定率 75.0	肯定率 73.2	肯定率 53.1	肯定率 56.8	肯定率 60.0
		家でゲームをする時間を決めてやっている				
	—	—	肯定率 60.4	肯定率 55.7	肯定率 48.0	
	△家族のささえ △学級の規範意識 △対人ストレス ▼思いを伝える力 ▼いじめのサイン	△友達のささえ △先生のささえ △成功体験と自信 △充実感と向上心 △他者からの評価 △問題解決力 △学級の絆 ▼いじめのサイン	△学級の絆 △生活習慣 ▼規範意識 ▼いじめのサイン ▼学習習慣	△家族のささえ △友達のささえ △先生のささえ △学級の規範意識 △学級の絆 ▼学習習慣	△家族のささえ △感動体験 △他者からの評価 ▼規範意識 ▼社会参画 ▼学級の規範意識 ▼学級の絆 ▼学習習慣	

2. 調査結果のまとめと分析

①26年度に比べ、区または国の平均を上回った学年・教科が以下のとおりになった。
2年 国・算 3年 国・社・算 4年 社 5年 国・社 6年 社
 3つの学年の国語の力が改善した。ここ数年取り組んでいる辞書引き学習の成果であると思われる。
 低・中学年の算数は少人数指導の下、着実に学力が定着しているものの、学年によるバラツキが見られる。
 ②学年による学力の差に開きが見られる。また、二極化が疑われる教科・学年が見られる。
 ③国語では表現力に課題のある学年が見られるものの、全体としては、知識・理解・技能を中心に着実に学力が身に付いている。
 ④5年生の社会は高得点である。
 ⑤意識調査から授業を集中して受けている児童が多いが、学年によって差がある。
 ⑥読書の量がやや少ない
 ⑦家庭学習の充実が不可欠である。意識調査でも家庭学習力が低い。
 ⑧テレビ、ゲームの視聴時間も長い。家庭と連携を図る必要がある。

①しっかりと話を聞くことができる子供が多い。日頃の授業が充実しつづくと考えられる。今後、興味・関心さらに思考力・判断力・表現力を高める指導の工夫が必要である。
 ②基礎学力の定着を図るため、学ぶ姿勢の育成や朝学習・家庭学習の意図的計画的な指導を行っていく。
 ③全教科を通して表現力に着目し、自分の思いや考えをしっかりと文章に表すことや文章をじっくりと読む活動を確保する。グループによる学習や教え合い授業など形態を工夫し自らの意見や考えをもたせることが重要である。
 ④少人数指導で個に応じた指導の充実を図るとともに、問題解決型の授業を意図的に行い、筋道を立てて考える力の育成を図る。
 ⑤校内研究で培った意欲を高める授業を進めていく。
 ⑥引き続き、子供たちが興味関心を引く授業を行うとともに課題解決学習の授業を推進していく。
 ⑦一クラスの人数が多く、効率的な指導を目指す結果として教師主導型の授業が多い実態から、今後は問題解決型の授業や体験学習的な授業を意図的に取り入れていく必要がある。
 ⑧若手の教員が多く、月1回若手教員の研修・研究の機会を設定する。

3. 後期重点的に取り組むべき課題

①東京未来大学との共同研究で進めている児童の意欲的な学習態度の向上を目指し、自分の考えや感想を文章に表したり、ノート、カードやワークシートの記入の仕方や、自己の考えを分かりやすく相手に伝える力を向上させる。
 ②基礎学力のさらなる向上を目指す。特に基礎学力を図るために授業と家庭学習の連携を計画的に実施し、日常の教科学習での補足的な取組を行っていく。
 ③全教科を通して活用力の「表現力」に着目し、自分の思いや考えを確実に文章に表すことや、文章をじっくりと読む活動を確保する。
 ④児童の知的好奇心を引き出し、一人一人に課題をもたせ、問題解決型の達成感のある授業の改善に努めていく。
 ⑤朝学習での読書活動や日常の読み聞かせ活動の他、一人一人の読書量を増やし、読書の励行に努める。
 ⑥家庭と連携して自ら学ぶ力の育成のために家庭での学習習慣の確立を図る。

4. 目標を達成するための具体的な取組

(1) 日常の指導の充実のための取組

①東京未来大学との共同研究を生かし、適切な指導を進める。
 ア、東京未来大学との共同研究を進め、児童のモチベーションを引き上げ、研究成果を日頃の授業実践に生かした「研究の日常化」を実現させる。
 イ、低・中学年には少人数指導やT T指導を充実させ、個に応じた指導の充実させ、基礎学力の充実を図る。
 ②学習形態の多様化を図る。
 ア、問題解決学習や体験学習を多く取り入れ、児童が自ら課題を設定し、課題解決を通して自ら考え判断できる能力の育成に努める。
 イ、各教科の学習において、学習の成果を発表する機会を設定し、楽しさとやりがいを感じながら学習を進められる環境作りに努める。
 ウ、全教科を通して「書くこと」に重点を置き、自分の考えや感想を文章に表したり、ノートやワークシートの記入の仕方を継続的に指導する。
 ③全校体制で読書指導の充実を図る。
 ア、学校図書館を整備したので、さらなる有効活用を推進する。
 イ、朝学習での読書活動の定着を図る。
 ウ、地域人材を活用した読み聞かせ活動の充実と読書習慣の定着を図る。

(2) 自主的な学習の推進のための取組

①学習の習慣化を図る。
 ア、朝学習の時間を確保、活用し、基礎的基本的な事項の意図的・計画的な指導の徹底を図る。
 イ、自ら計画し実行できるよう家庭学習に対する指導の徹底を図り、その習慣化を図る。
 ウ、放課後学習教室・土曜授業のさらなる充実を図る。

5. 設定した目標の達成度を測るための指標

(1) 日常指導の充実のための取組

①単元ごとの評価テストで80%の児童が期待平均点以上がとれるよう日常の指導の充実を図る。
 ②すべての児童の読書量は年20冊以上を目指す。
 ③校内研究・学習意欲を高めるための指導に基づく授業研究を推進し、全員が年1回は研究授業を行う。

(2) 学力向上のための取組

①東京未来大学によるモチベーションアンケートで、9月の数値を1月には10%以上向上させる。
 ②学校関係者評価で「学校に楽しく通学している」の項目で95%が肯定するように魅力的な学校作りを推進する。
 ③後期児童アンケートを実施(1月)し、「授業が分かった」「授業が楽しい」といった授業満足度を調査し、80%以上を肯定的な回答にする。